



日本生態学会

No.26

2012年1月

ニュースレター

[目次]

第9回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム 1

記事

- I. 次々期会長及び次期全国委員選挙結果 3
- II. 全国委員会承認事項 3
- III. 書評依頼図書 4
- IV. 寄贈図書 5
- V. 後援・協賛 5
- VI. 地区会報告 5

お知らせ

- 1. 関東地区生態学関係修士論文発表会 12
- 2. The 9th Asia-Pacific Marine Biotechnology Conference APMBC2012 の
お知らせ 13

書評 13

京大大学生態学研究センターニュース 16

第9回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム

2011年10月31日 9:30—17:00 於：筑波大学 大学会館
執筆者 キャリア支援専門委員会 別宮（坂田）有紀子、三宅恵子

◆分科会 A 「震災で浮き彫りとなった科学のこれまでと今後」

“健康を科学する”と題し日本宇宙生物科学会のWGによる企画として、大地震を経験し浮き彫りとなった、持続的環境維持や生命にとって必要な科学のあり方と今後について焦点をあてた講演と討論があった。4名の各分野の研究者からの講演の後、パネルディスカッションによる総合討論がおこなわれた。

放射線の生物影響に関する専門家である大西武雄氏（奈良県立医科大学）からは、これまでの疫学的な調査などのデータをもとに放射線量と人体への影響について、宇宙農業構想研究を基盤とした地球への環境修復に関して取組む山下雅道氏（宇宙航空研究開発機構）からは、ヒマワリをつかった除染浄化活動についての報告があった。続いて奥平恭子氏（会津大学）から、震災後の福島県内の実態および大学がどのように対応してきたかについて、跡見順子氏（東京大学）からは、震災に関連した身体の健康について講演があった。続くパネルディスカッションでは、これまでの科学と震災後に特に急務となる科学について、また未来に向けて必要な科学について議論がおこなわれた。

◆分科会 B 「これからの若手、女性リーダー育成に向けた取り組み」

女性リーダーの育成のための方策について、組織的な取り組みをおこなっている5つの機関の実践例が紹介された。

- 1) 応用物理学会の高井まどか氏より、人財育成・教育事業委員会での取り組み例が報告された。「若手・女性研究者のネットワーク構築」をテーマにした講演会の紹介があり、その中で、若手、女性研究者のキャリア支援として主に3つのポイントが挙げられていた。1) 視野を広げ情報を交換・共有するためにも異分野交流、異なる立場の交流が重要。2) 若手・女性研究者のネットワーク構築や支援活動の継続には何らかのメリットが必要。3) キャリアの可能性を広げるためには研究分野内でのネットワークが必要で、学会はそのための「場」を提供している。応用物理学会では若手・女性のキャリア支援を積極的におこなっており、年次大会でも「博士のキャリア相談会」をおこない、求人側、求職側、合わせて約100名の参加があったそうだ。その他、キャリア形成のロールモデル集の作成、HPや小冊子の作成もおこなっていることなどが報告された。生態学会での取り組みと重なる部分や参考になる部分も多かった。
- 2) JST男女共同参画担当の佐藤比呂彦氏からJSTにおける取り組みの紹介があった。JSTでは“さきがけ”や“なでしこ”などの研究補助金の公募に関して、女性研究者への積極的な応募を呼び掛けており、過去の統計から、女性の応募数が増えれば採択数も比例して増えていることが報告された。その他、理系をめざす青少年を増やす取り組みや、女子中高生の理系進路選択支援等について報告があった。その取り組みの一環として作成された「ロールモデル集」がサンプルとして配布されたが、これが大変よくできた内容で、女子中高生でなくとも十分に理系進路選択に魅力を感じる内容になっていた。個人的には、世の中で活躍している女性研究者がこんなにも大勢いること、女性研究者の多くに共通している前向きでポジティブな姿勢に感銘を受けた。女子中高生だけでなく、大学生、大学院生が読んで元気と勇気をもらえる内容だと思う。
- 3) 産業技術総合研究所の澤田美智子氏より産総研でおこなわれている女性研究者に対する応援事業について報告があった。女性リーダー育成のための各種研修（室長クラスを対象としたダイバーシティー・マネジメント研修や、女性職員を対象とした意欲触発・キャリア形成に関する研修など）やカウンセリング、懇談会等をおこなっていること、ワークライフバランス支援策として有給休暇制度の改善等が報告された。質疑応答の中で、外部資金雇用のポストクに対するキャリア支援の難しさが指摘された。
- 4) 東京大学男女共同参画室の三浦有紀子氏より、東大における取り組みが報告された。女子学生および女性教員の比率を2020年までに、それぞれ30%、20%まで上げるという数値目標を設定しているが、まだまだ及ばないこと、しかしながら、理工農系における女性限定の教員公募や、女子学生増加のための取組、女性研究者サポート要員配置事業、キャンパス内保育所の設置等、積極的な方策がおこなわれていることが報告された。

5) 企業における取り組み例として NTT マイクロシステムインテグレーション研究所の為近恵美氏から報告があった。近年は、男女というよりダイバーシティー推進に重点が置かれていること、その枠組みの中で女性のキャリア開発支援や、ワークライフバランス支援がおこなわれていること等が報告された。

全体ディスカッションでは、今後の若手・女性リーダー育成に向けた取り組みとして必要な方策として、女性研究者のネットワーク構築、多様なキャリアパスやロールモデルの提示、情報提供や情報交換、理系進学支援、キャリアカウンセリング等が示された。続く質疑応答では、特に外部資金雇用のポストクの支援策についての意見・質問が多かったように思う。ポストク支援に関しては、研究機関、学協会、行政の3者がすべきことできることについて意見交換がなされた。その中で、各学協会連携して大学や文科省により一層のポストク支援を要求してゆく必要性が指摘された。女性研究者数の増加も女性リーダーの育成も、現在のポストク問題の解決なくしては達成できないということ強く感じた。

◆パネル討論Ⅰ「社会が求める科学と科学者～女性科学者への期待」

首都大学東京の菊池吉晃氏が「人間の脳と自発性の研究から」というテーマで、女性の脳と「母性愛」の関係について講演された。次に東京大学の跡見順子氏が「Social Wish の発見～重力を利用して“変わること・変えることができる身心システム”を進化させてきた人間が、自分を知ることと自分を知る教育プログラム～G-Connedtion!, Gnothi seauton!」というタイトルで講演をおこなった。

その後、NPO 法人「高齢社会をよくする女性の会」理事長の樋口恵子氏から、なぜ男女共同参画なのか、半分の性だけに力点・視点が置かれた社会の問題点、育児支援だけでなく母親支援も必要、少子化の原因について等、ユーモアも交えた楽しいお話をいただいた。最後に作家で精神科医のなだいなだ氏より女性の置かれていた社会的地位の歴史の変遷について氏独特のユーモラスな語り口で話題提供をいただいた。

◆パネル討論Ⅱ「社会が求める連絡会～女性科学者が（だから）できること・連絡会の今後のあり方」

3.11 の大震災後の状況は、日本の科学者が国際的視野にたち、真に何が重要かを考え行動するよう変革を求めている。そのためには潜在的な人財としての女性研究者がこれまで以上に一歩前に出て活躍することで平等・安全・平和な社会を築いていくことに貢献できると考えられる。これまで連絡会が実施してきた大規模アンケート調査を踏まえ、女性科学者が（だから）できることに鑑み・連絡会の今後のあり方を見直す機会として企画された。加盟学会、大学機関、企業から斬新かつ意欲的な取組をしている 10 グループから、7つのキーワード（Encourage：日本化学会、Positive action：九州大学、北海道大学、Beyond gender equality：応用物理学会、生態工学会、Education：筑波大学、Potential：大阪府バイオ人財マッチング事業、Gnothi seauton：清水美穂 東京大学、Enquete：高分子学会、塩満典子 JST・科学技術システム改革事業推進室長）でつないだり発表方式での話題提供があり、最後の総合討論では第3回大規模アンケート調査の重要性と参加への協力の呼びかけがあった。

本シンポジウムのテーマ「今、社会が科学者に求めること—ソーシャル・ウィッシュ」のとおり、男女共同参画の意義や重要性を踏まえた上で、社会的要請に応える科学の責任や重要性について示唆に富んだシンポジウムであった。

日本生態学会からは、キャリア支援専門委員3名の参加の他、キャリア支援専門委員会によるポスター発表を行い、全国大会開催時における託児所の設置、女子中高生夏の学校～科学者・技術者のたまごたちへ～での講座の開設、男女共同参画と若手キャリア支援のためのフォーラムの開催など、これまでの男女共同参画の取組について報告した。

記 事

I. 次々期会長及び次期全国委員選挙の結果について

2011年10月31日に投票を締め切り、11月21日に日本生態学会事務局において開票を行った結果、次々期会長および第16期全国委員は下記のように決定いたしました。

なお任期は、会長が2014年1月1日から2015年12月31日、全国委員が2012年1月1日から2013年12月31日までのそれぞれ2年間です。

日本生態学会選挙管理委員会
委員長 酒井 章子

1. 次々期会長 投票数 400 票 (内有効投票数 391 票)

選出	齊藤 隆	95 票
次点	可知 直毅	80 票
	甲山 隆司	78 票
	嶋田 正和	52 票
	原 登志彦	19 票
その他	52 名 (合計)	67 票

2. 全国委員

全国選出

順位	氏 名	所属地区会	得票数
1	嶋田 正和	(関東)	38
1	湯本 貴和	(近畿)	38
1	占部 城太郎	(東北)	38
4	粕谷 英一	(九州)	37
5	工藤 岳	(北海道)	35
6	中静 透	(東北)	34
7	佐竹 暁子	(北海道)	33
8	可知 直毅	(関東)	31
9	矢原 徹一	(九州)	29
10	仲岡 雅裕	(北海道)	28
11	酒井 章子	(近畿)	26
12	竹中 明夫	(関東)	24
12	加藤 真	(近畿)	24
14	宮竹 貴久	(中四国)	23
15	大手 信人	(関東)	22
次点	鈴木 まほろ	(東北)	21
	西廣 淳	(関東)	21
	彦坂 幸毅	(東北)	21

地区選出 (氏名・票数)

北海道	工藤岳 9 綿貫豊 6*	野田隆史 8 中村太士 6	佐竹暁子 7 大原雅 6
東北	占部城太郎 6 松政正俊 5	黒川紘子 5 清和研二 5	陶山佳久 5*
関東	西廣淳 10 可知直毅 9	五箇公一 9*	小池文人 9
中部	津田智 8	紙谷智彦 5*	
近畿	丑丸敦史 10 奥田昇 7	加藤真 10 陀安一郎 7	近藤倫生 7*

中四国 鎌田磨人 12 中越信和 11*
九州 粕谷英一 12 相場慎一郎 7 久保田康裕 7*
巖佐庸 7

選挙細則第7条1により同票の場合は年少者優先、また第7条2により同一人が全国・地方区の両方で選出された場合、全国選出を優先するため地区選出委員は下線の方々になりました。〔*〕は次点

3. 地区別会員数・投票者数及び投票率

	会員数	投票者数	投票率(%)
北海道	435	53	12.1
東 北	276	26	9.4
関 東	1439	119	8.3
中 部	588	43	7.3
近 畿	715	83	11.6
中四国	314	35	11.1
九 州	324	40	12.3
海 外	48	2	4.2
全 国	4139	401	9.7

II. 全国委員会承認事項

1. 会長および全国委員選挙施行細則改正 (改正前)

第4条 選挙は正会員の互選（無記名投票）による。

2 投票は所定の用紙を用い、会則第14条に従って選挙管理委員会が定めた期日までに到着するように郵送しなければならない。

3 会長選挙用紙に1名の氏名を、また、全国委員選挙用紙には、全国から選出される全国委員については10名の氏名を、さらに地区から選出される全国委員については投票者の所属地区の3名の氏名を記入する。

第5条 第4条によって行われた投票を有効とする。ただし定足数を越えて記入した場合はその投票用紙を、また、同じ候補者が重複記入されている場合は重複した分の投票を無効とする。その他に関し有効無効の決定は選挙管理委員会が行う。

(改正後)

第4条 選挙は正会員の互選（無記名投票）による。

2 投票は所定の方法で行い、会則第14条に従って選挙管理委員会が定めた期限までに完了しなければならない。

3 会長選挙では1名を、また、全国委員選挙では、全国から選出される全国委員について10名を、さらに地区から選出される全国委員について投票者の所属地区の3名に投票する。

第5条 第4条によって行われた投票を有効とする。ただし定足数を越えて投票された場合はその投票を、また、同じ候補者が重複投票されている場合は重複した分の投票を無効とする。その他に関し有効無効の決定

は選挙管理委員会が行う。

第9条 この細則の変更には全国委員会の3分の2以上の同意を要する。

2. 選挙管理委員追加

谷内 茂雄（京大生態学研究センター）

3. ドイツ・スイス・オーストリア生態学会より共同研究や情報交換などを目的として日本生態学会との連携を深めたいと打診があり、Memorandum of Agreement締結について承認した。

4. 電子情報委員会設置および委員承認

【活動内容】

学会サーバーの管理、選挙の電子化、大会企画に関わる電子プログラムの作成、メーリングリストの作成など

【委員】（任期：2012年1月1日～2013年12月31日）

竹中 明夫（委員長：国立環境研究所）

久保 拓弥（北海道大学）

関野 樹（総合地球環境学研究所）

富田 基史（電力中央研究所）

眞板 英一（国立環境研究所）

大澤 剛士（農業環境技術研究所）

5. 学会各賞受賞者決定

第10回日本生態学会賞

松田 裕之（横浜国立大学大学院環境情報研究院）

第5回日本生態学会大島賞

石井 弘明（神戸大学農学部）

半谷 吾郎（京都大学霊長類研究所）

第16回日本生態学会宮地賞

内海 俊介（東京大学大学院総合文化研究科広域システム科学系）

原野 智広（九州大学大学院理学研究院生物科学部門生態科学研究室）

三浦 収（高知大学総合研究センター）

6. 次期庶務幹事および会計幹事

（任期：2013.1.1～2014.12.31）

庶務幹事 石田 清（弘前大学農学生命科学部生物学科）

会計幹事 牧野 能士（東北大学大学院生命科学研究所）

7. 保全生態学研究編集委員

（任期：2012.1.1～2014.12.31）

委員長 角野 康郎

編集幹事 西廣 淳 三橋 弘宗

編集委員 井口 恵一朗 石井 実

石濱 史子 井上 幹生

植田 陸之 梅原 徹

加藤 真 角谷 拓

河口 洋一 倉本 宣

小池 裕子 小池 文人

館野 正樹 高田 まゆら

中越 信和 高槻 成紀

長谷川 雅美 早矢仕 有子

藤井 伸二 増田 理子

山本 智子 湯本 貴和

横溝 裕行 横山 真弓

Ⅲ. 書評依頼図書（2011年5月～2011年12月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 小寺祐二「イノシシを獲る ワナのかけ方から肉の販売まで」（2011）136pp. 農文協 ISBN:978-4-540-09256-5
2. 中坊徹次監訳「知られざる動物の世界2 原始的な魚のなかま」（2011）116pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-17762-6
3. 湯本貴和・須賀丈編著「信州の草原 その歴史を探る」（2011）178pp. ほおずき書籍 ISBN:978-4-434-15541-3
4. 日本直翅類学会監修 村岡貴史・伊藤ふくお著「バッタ・コオロギ・キリギリス生態図鑑」（2011）452pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-1394-3
5. 大西文秀著「環境容量からみた日本の未来可能性」（2011）184pp. 大阪公立大学共同出版会 ISBN:978-4-901409-83-4
6. 中坊徹次監訳「エイ・ギンザメ・ウナギのなかま」（2011）124pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-17763-3
7. 鹿児島環境学研究会編「鹿児島環境キーワード事典」（2009）248pp. 南方新社 ISBN:978-4-86124-165-9
8. 鹿児島大学鹿児島環境研究会編「鹿児島環境学Ⅰ 総説、屋久島論ほか」（2009）204pp. 南方新社 ISBN:978-4-86124-164-2
9. 鹿児島大学鹿児島環境研究会編「鹿児島環境学Ⅱ 奄美を世界遺産へ」（2010）288pp. 南方新社 ISBN:978-4-86124-193-2
10. 鹿児島大学鹿児島環境学研究会編「鹿児島環境学Ⅲ 特集徳之島」（2011）280pp. 南方新社 ISBN:978-4-86124-226-7
11. 萩原彰著「アメリカの環境教育 歴史と現代的課題」（2011）228pp. 学術出版会 ISBN:978-4-284-10331-2
12. 田村典子著「リスの生態学」（2011）216pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060192-4
13. 林勇夫監訳「知られざる動物の世界5 単細胞生物・クラゲ・サンゴ・ゴカイのなかま」（2011）124pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-17765-7
14. 日本陸水学会編「川と湖を見る・知る・探る 陸水学入門」（2011）204pp. 地人書館 ISBN:978-4-8052-0838-0
15. 西川潮・宮下直編著「外来生物 生物多様性と人間社会への影響」（2001）284pp. 裳華房 ISBN:978-4-7853-5848-8

16. 中丸麻由子著「シリーズ社会システム学④ 進化するシステム」(2011) 348pp. (株) ミネルヴァ書房 ISBN:978-623-05929-4
17. 阿部治監修・荻原彰編著「高等教育とESD 持続可能な社会のための高等教育」(2011) 178pp. 大学教育出版 ISBN:978-4-86429-067-8
18. 多田多恵子著「身近な木の実・植物の種 図鑑&採集ガイド」(2012) 128pp. 実業之日本社 ISBN:978-4-408-45371-2
19. 山田文雄・池田透・小倉剛編「日本の外来哺乳類管理戦略と生態系保全」(2011) 450pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060221-1

IV. 寄贈図書

1. 「Marine Geology Map no.70-73 (CD)」(2011) 独立行政法人産業技術研究所
2. 「多摩川第131・132号」(2011) 16pp. 公益財団法人とうきゅう環境財団
3. 「SESSILE ORGANISMS Vol.28 No.2」(2011) 84pp. 日本付着生物学会
4. 「うみうし通信 No.72」(2011) 12pp. 財団法人水産無脊椎動物研究所
5. 「学術会議叢書 18 科学を文化に サイエンスアゴラ・シンポジウムの記録」(2011) 208pp. 財団法人日本学術協力財団
6. 「鹿島学術振興財団第35回 2010年度年報」(2011) 370pp. 財団法人鹿島学術振興財団
7. 東レ科学振興会第51回事業報告書」(2011) 156pp. 公益財団法人東レ科学振興会

V. 後援・協賛

日本生態学会では、下記のシンポジウム・セミナーを後援・協賛しました。

1. 市民向け公開シンポジウム「大津波で被害を受けた沿岸域の生物多様性の現状～海辺のいきものたちはどうなっているのか～」
日時：2012年2月5日(日) 13:30-16:30
会場：仙台国際センター 萩
主催：東北沿岸生態連絡会、東北大学生態適応GCOE
2. 文部科学省特別教育研究経費(連携融合事業)国際シンポジウム「大型野生動物の管理システムの構築：クマ、シカ、イノシシとの共存を目指して」
日時：2012年1月24日(火)・25日(水)
会場：東京農工大学農学部本館講堂
主催：東京農工大学
3. The 9th Asia-Pacific Marine Biotechnology Conference (APMBC2012) 国際会議
会期：2012年7月13日-16日
会場：高知市文化プラザ かるぼーと

VI. 地区会報告

北海道地区会

- (1) 平成22年度(2010年度)生態学会北海道地区会総会

第58回日本生態学会大会(札幌大会)開催にともない、2010年度は例年行なっている研究発表大会を開催せず、役員会、総会のみを開催した。

2011年2月26日(土曜日)北海道大学 低温科学研究所 13:30より開催

出席者 7名

議題：石狩海岸の風力発電事業計画の中止を求める意見書(案)について

佐藤謙・自然保護委員が議題として提案、過程を説明した。出席者の賛成により、生態学会の自然保護専門委員会(3月8日)に提案することを可決した。

生態学会札幌大会・齊藤実行委員長が大会準備状況・会計について報告した。

隅田会計幹事が2010年会計年度(2010年1月から12月)の収支状況(地区会開催雑費、若手研究会の支援)および生態学会札幌大会・北海道発企画(シンポジウム)3つの支援決定内容について報告した。

(2) 生態学会札幌大会・北海道発企画を支援した。

日本生態学会北海道地区会は、2010年5月18日付けで北海道地区会員向けに公募した「北海道発企画」のカテゴリー1に3件の応募があった。これらを採択し、計5名の外国人研究者を招聘する旅費を助成した。この助成により、第58回日本生態学会大会(札幌大会)シンポジウムにおいて発表していただくなど、研究・交流へ役立てていただいた。

1件目：北海道発企画申請者 野田隆史(北大・地球環境) S03 Links between different approaches in community ecology: the possibility and the potential availability 企画者：森照貴(土木研究所)、野田隆史(北海道大学) 旅費助成をうけた招聘者 Dr. Jason E Tanner (South Australian Research and Development Institute, Australia)

2件目：北海道発企画申請者 飯田佳子(北大・環境科学) S09 Scaling up plant traits to species performance based on cost-benefit balances: Towards general concepts of trait-based community ecology” 企画者：飯田佳子(北海道大学)、小野田雄介(九州大学)、黒川紘子(東北大学)、山田俊弘(広島大学) 旅費助成をうけた招聘者 Dr. Niels Anten (Utrecht University, the Netherlands)、Dr. Frank Sterck (Wageningen University, the Netherlands)

3件目：北海道発企画申請者 宮崎祐子(北大・地球環境) S14 A multidisciplinary approach to explore the mechanism of mast seeding: combination of modeling and molecular/field experiments 企画者：宮崎祐子(北大・環境科学)、佐竹暁子(北大・環境科学) 旅費助成をうけた招聘者 Dr. Walter D. Koenig (Cornell University, USA)、Dr. Elizabeth Crone (Harvard University, USA)

(3) 学生企画型研究会「第30回北海道若手生態学研究会」への助成を行った。

2010年度は江川知花(北海道大学)が代表となって2011年2月19日～20日に北海道立砂川少年自然の家ネイバル砂川にて開催された。講演者は以下のとおり：佐藤拓哉(京都大学)、飯田佳子(北海道大学)、森長真一(東京大学)、田邊優貴子(国立極地研究所)、天野達

也（農業環境技術研究所）

東北地区会

(1) 東北地区会第 55 回大会を開催

開催日：2010 年 12 月 18・19 日

会場：秋田県立大学

第 1 部&第 2 部 12 月 18 日

「R をつかってみよう—一回帰分析と多変量解析の例—」

八木橋勉（森林総研東北）・星崎和彦（秋田県立大）

「エクセルとテキストエディタの便利な使い方—R はもちろん、普段使いにも—」星崎和彦（秋田県立大・生物資源）

ポスター発表

「ササ—斉開花・枯死後にブナはどこで更新するのか？—林冠構造の時空間的不均一性がブナ稚樹個体群構造に与える影響—」佐藤朋華（秋田県大院・生物資源）・山月融心・井上みずき・星崎和彦・阿部みどり・蒔田明史（秋田県大・生物資源）

「溪畔景観の樹木分布に与える生活史特性と種子散布制限の影響」星崎和彦・田中裕志（秋田県立大・生資）・沖慎司（秋田県大院・生資）・柴田銃江・星野大介（森林総研東北）

「芦生天然林（京都府）における大規模防鹿柵による下層植生回復実験—中間報告—」井上みずき（秋田県大）・阪口翔太（京大）・藤木大介（兵庫県立大）・福島慶太郎・高柳敦・山崎理正（京大）

「火入れが埋土種子群に与えた影響—ススキ草原の復元に向けて—」佐々木裕子（岩手大院・人文社会）・竹原明秀（岩手大・人文社会）

「パーソナル簡易空撮気球による雑草調査の効率化」村上敏文・小林浩幸・山下伸夫・内田智子・好野奈美子（東北農研）

「草本植物の分布と土壌化学特性の関係—青森県十和田地域を例に—」水野創史（北里大院・獣医畜産）・杉浦俊弘・馬場光久・河内麻友子（北里大・獣医）・平館俊太郎・楠本良延（農環研）・島田直明（岩手大・総合政策）

「八甲田山田代平における外来植物ブタナの分布について」十亀彩（北里大院・獣畜）・杉浦俊弘・小島達也・森大祐・横川輝・馬場光久（北里大・獣）

「ブナの豊作がアカネズミの個体群動態と遺伝的多様性に与える影響」高野雄太（秋田県立大院）・三田瞬一・増谷優・井上みずき・星崎和彦（秋田県立大）

「ブナの開花頻度の個体差に気象が与える影響—豊作年以外の開花はなぜ起こるのか—」須藤泰典（山形大院）・小山浩正・高橋教夫（山形大・農）

「ニセアカシア種子における休眠と非休眠の生産比率—個体による違いと河川周辺におけるその分布—」千葉翔（山形大・院）・小山浩正・高橋教夫（山形大・農）

第 3 部 12 月 19 日

「R 実用例—温暖化がブナ林の分布適域に及ぼす影響—」八木橋勉（森林総研東北）・松井哲哉（森林総研北海道）・中谷友樹（立命館大）・田中信行（森林総研）

「行列モデルを用いて景観スケールで樹木の絶滅確率を予測してみる」石田敏（東北大院・生命科学）

(2) 地区委員会報告

2010 年度定例地区委員会は、2010 年 12 月 18 日に秋田県立大学において開催され、以下の議題について報告および審議がなされた。出席者は以下の 14 名であった。石田清・鳥丸猛・柴田銃江・竹原明秀・松政正俊・占部城太郎・陶山佳久・清和研二・蒔田明史・星崎和彦・井上みずき・小山浩正・林田光祐・牧野渡（会計幹事）

<報告事項>

・庶務報告

1) 2010 年 2 月 26 日：地区会会報第 69・70 合併号を発行した。

2) 2010 年 5 月 19 日：生態学会自然保護専門委員会からの委員改選の依頼を受け、地区委員からの推薦を受けた。推薦人の多かった竹原明秀氏を再選し、交代希望のあった鈴木孝男氏に替わって東信行氏を選出した。ただし、鈴木氏から東氏への交代は、自然保護専門委員会への連絡が遅れたため、両氏の了解を得て次期改選（2012 年 3 月）の時からとすることとした。

3) 2010 年 9 月 16 日：7 月 31 日に締め切られた地区委員選挙（選挙管理委員：鹿野秀一氏・鈴木孝男氏）の結果、以下の 25 名が選出された（任期：2010 年 8 月 1 日～2012 年 7 月 31 日。以下敬称略）。

青森県 3 名：東信行・石田清・鳥丸猛（次点：佐原雄二）
岩手県 5 名：鈴木まほろ・柴田銃江・竹原明秀・牧陽之助・松政正俊（次点：島田卓哉・松木佐和子）

宮城県 9 名：占部城太郎・中静透・酒井聡樹・陶山佳久・清和研二・鹿野秀一・河田雅圭・彦坂幸毅・千葉聡（次点：鈴木孝男・牧雅之）

秋田県 3 名：蒔田明史・星崎和彦・井上みずき（次点：成田憲二）

山形県 3 名：小山浩正・玉手英利・林田光祐（次点：辻村東國）

福島県 2 名：黒沢高秀・木村勝彦（次点：古内栄一）

4) 2010 年 9 月 30 日：地区委員の互選の結果、地区委員長に占部城太郎氏（東北大学）が選出された。また、地区委員長の委嘱により、庶務幹事を鈴木孝男氏（東北大学）、会計幹事を牧野渡氏（東北大学）が引き受けることとなった。

5) 2010 年 11 月 15 日：第 55 回地区大会及び総会の案内を送付した（秋田県）。

6) 2010 年 12 月 10 日：第 55 回地区大会のプログラムを送付した（秋田県）。

7) 2010 年 12 月 18 日：秋田県立大学において地区委員会を開催した。

8) 2010 年 12 月 18・19 日の両日にわたって、秋田県立大学において第 55 回地区大会及び総会を開催した。

・会計報告

2009 年度決算報告とその会計監査報告、2010 年度中間報告ならびに今後の執行見込について報告があり、一部修正の上、了承された。

<審議事項>

・2011 年度予算

2011 年度予算案について説明があり、了承された。

・会計監事の選出

会計監事に鹿野秀一氏（東北大学）を推薦し、承認された。

・盛岡大会余剰金の扱いについて

盛岡大会（2009年3月開催）の余剰金170万円が東北地区会に還元されることを受けて、その扱いについて議論した結果、盛岡大会実行委員会に優先的に使用してもらうことが承認された。また、盛岡大会実行委員会が「岩手生態学ネットワーク」の事業にそれを充てることにした旨についても合わせて承認された。

・次回、次々回大会について

次回地区大会を山形県で行うことが報告された。

次々回地区大会は、福島県での開催の了承を得た。

・その他

地区会の活性化について種々の論議がなされた。

(3) 総会報告

2010年度東北地区総会は、2010年12月19日に開催され、総会議長に蒔田明史氏を選出し、以下の議題について報告および審議された。

・地区委員会における庶務報告・会計報告が了承された。

・2011年度予算案が、原案を一部修正の上、承認された。すなわち、「実質的支出」を削除した上で「次年度への繰越金」を「予備費」へと名目変更すること、とされ承認された。

・盛岡大会余剰金の扱いに関する地区委員会での決定が承認された。

・地区会の活性化について「地区会活性化ワーキンググループ（WG）」を設け議論を続けることが承認され、WG幹事として星崎和彦氏（秋田県立大学）、松木佐和子氏（岩手大学）が選出された。なおWGの活動に際して予算が必要な場合には、地区委員長の承認を得て、7万円を上限として予備費から支出することが承認された。

・次回地区大会を山形県で行うことが承認された。

関東地区会

2011年（1月～12月）活動報告

(1) 2011年1月に地区会事務局を首都大学東京からつくばに移転した（新地区会長：竹中明夫（国立環境研究所））。

(2) 2011年1月8日（土）に、秋葉原ダイビルにおいて、日本生態学会関東地区会公開シンポジウムおよび総会を開催した。シンポジウムのプログラムは以下の通り。
テーマ：多型現象：その時空間的变化と存在意義

主催：日本生態学会関東地区会

企画：高橋佑磨・鶴井香織

(1) 鶴井香織（弘前大学）：トレードオフが多型を共存させる？—ハラヒシバツタの色斑における隠蔽と体温調節—

(2) 高橋佑磨（筑波大学）：頻度依存選択の検証：アオモンイトトンボにおける雄の干渉と雌の多型

(3) 角谷拓（国立環境研究所）：ニホンカワトンボ個体群における翅色多型比の時空間動態とその要因

(4) 高倉耕一（大阪市立環境科学研究所）：忘れ去

られた「多型」の存在—在来雑草イヌノフグリと外来種—

(5) 酒井陽一郎（京大大学生態学研究センター）：タモロコ属魚類の摂食多型はプランクトン群集の栄養構造を変える！

(3) 2011年1月31日に地区会報第59号を発行した。内容は以下の通り。

「2010年度の公開シンポジウム「多型現象：その時空間的变化と存在意義」の記録」林文男・可知直毅
「隠蔽色の色斑多型の適応的意義—ハラヒシバツタ *Tetrix japonica* による検討と展望」鶴井香織・本間淳・西田隆義

「頻度依存選択の検証：行動の可塑性から進化動態まで」高橋佑磨

「ニホンカワトンボ個体群における翅色多型比の時空間動態とその要因」角谷拓

「イヌノフグリ“多型”—石垣環境への適応と種子散布者との関係—」高倉耕一・西田佐知子・西田隆義

「タモロコ属魚類の栄養多型はプランクトン群集の栄養構造を変える！」酒井陽一郎

地区会活動記録およびお知らせ

第30回関東地区生態学関係修士論文発表会

第31回関東地区生態学関係修士論文発表会のお知らせ

2010年活動報告

2010年会計報告

地区会会報の冊子体送付希望調査の結果

(4) 2011年2月26日（土）に、筑波大学 筑波キャンパスにおいて、第31回生態学関係修士論文発表会を開催した。当日のプログラムは以下の通り。

「東京湾干潟ベントスの多様性保全—局所個体群空間としての湾岸水路内干潟の重要性—」柚原剛（東邦大）

「農業水路ネットワークにおける絶滅危惧種ヤリタナゴの生息に影響する要因」照井慧（東京大）

「埼玉県越生町のフトスジミズミズ個体数密度と植生・地形の関係について」小沼聡美（立正大）

「外来ザリガニに対する生物的抵抗」千谷久子（東京大）

「千葉県北西部におけるヘイケボタル生息適地の推定—幼虫・蛹・成虫時の環境に注目して—」柿本恵里那（東邦大）

「ハーバリウム標本情報のGIS化による植生研究の検討」鈴木智香久（首都大）

「カナダ西部の河畔林における選択伐採が針葉樹実生の更新に与える影響—*Gaultheria shallon* と *Rubus spectabilis* の影響に着目して—」大場麻衣（玉川大）

「群馬県赤谷川上流域における治山堰堤の設置とその破損が溪畔植生に与える影響」林雄太（東京農工大）

「異なる伐採条件下での針広混交林の動態と木材収穫—個体ベースモデルによるシミュレーション—」辰巳晋一（東京大）

「玉原高原におけるブナ林復元に関する研究」土屋早奈子（東工大）

「落葉広葉樹林における異なる3手法を用いた土壌呼吸の分離」友常満利（早稲田大）

「根の切除頻度と強度が3種のウキクサ植物の成長にお

よぼす影響」鈴木乾也（首都大）

「近隣個体のサイズと土壤栄養塩に対する根の反応によって変化する地下部植食者が植物に及ぼす影響」角田智詞（首都大）

「乾燥ストレス時のCO₂拡散コンダクタンスの変化とそれをもたらす要因の検討」溝上祐介（東京大）

「光損傷を受けた光化学系IIの修復：コストの推定と光馴化の影響」宮田一範（東京大）

「高緯度北極における植物病原菌（黒紋病）がキョクチャナギの光合成生産に与える影響」増本翔太（総研大）

「日本産スイカズラ属植物の分子系統学的解析と花形態の多様化」中路真嘉（首都大）

「南アルプス亜高山帯渓流域における高木性樹木の分布と微地形」近藤博史（横国大）

「北アルプス後立山連峰における雪田型植生の種組成と立地」石田祐子（東京農大）

「北海道オホーツク海側の流紋岩地におけるミズナラ林の種組成と立地」板垣友規子（東京農工大）

「渡良瀬川流域に成立する溪畔林におけるネコノメソウ属（*Chrysosplenium* L.）5種の分布と生育立地」深町篤子（東京農工大）

「シマオオタニワタリ類における♂生殖的隔離の成立過程の解明」山田香菜子（首都大）

「クヌギカメムシ類における共生細菌叢の解明」貝和菜穂美（東京大）

「食物網のインタバリティの低下は群集の存続性を高めるよう起こる」長田穰（東京大）

「個体群動態が影響を及ぼす進化動態：ワムシー藻類系を用いた実験研究」笠田実（東京大）

「埼玉県熊谷市におけるアブラコウモリの採餌行動と採餌場所の分布」若林仁（立正大）

「栃木県および島根県のイノシシの食物利用パターンの共通性」芝崎亜季子（立正大）

「逃避戦術の時空間的変動からみた被害防除活動へのカワウの応答」富永光（筑波大）

「ツバメの雄は雌の不貞な行動に応じて給餌を削減する」菅原鮎実（東京大）

「移入鳥類ガビチョウの生態学的研究」宮澤絵里（首都大）

「歩行軌跡からみる寄生蜂 *Heterospilus prosopidis* の宿主探索における適応行動」阿部真人（東京大）

中部地区会

(1) 2011年度第1回日本生態学会中部地区会

日時：2011年6月4日（土）、5日（日）

会場：長野県小谷村「サンテインおたり」

議事（6月4日）：

1) 地区会の運営と年次計画

2) 静岡市で行われる予定の全国大会の日時、会場（静岡グランシップ）、仮委員を決定した。

エクスカッション（6月5日）：小谷村のブナ林の観察（※小谷村の協力による）

【一般講演】（6月4日）

1) ユネスコエコパーク志賀高原の現状について（井田秀行 信州大学教育学部）

2) 小谷村、白馬村のユネスコエコパークの可能性について（増澤武弘 静岡大学理学部）

3) 環境マイスターからみた白馬山系の自然について（佐藤利幸 信州大学理学部）

(2) 2011年度第2回日本生態学会中部地区会

日時：2011年12月3日（土）

会場：静岡大学大学会館3階セミナーホール

議事：

1) 地区会の運営と年次計画

2) 会計報告

3) 平成24年度日本生態学会大会（静岡）について大会会長には増澤武弘氏（静岡大）、実行委員長には小南陽亮氏（静岡大）が選出された。

【一般発表】（参加者80名）

1) 「愛知県弥勒山における *Apodemus* 属2種の餌資源及び林相別遺伝的構造の相違について」白子智康、石澤祐介、上野薫、南基泰（中部大・院・応用生物）

2) 「DNAバーコードを用いたヴェトナム・Cat Tien国立公園に生息するネズミ科の餌資源調査」石澤祐介、白子智康、味岡ゆい、上野薫、南基泰（中部大・院・応用生物）、Nguyen Huynh Thuat, Do Tan Hoa, Tran Van Thanh（Cat Tien National Park）

3) 「モウセンゴケ属植物の環境中空素への適応機構に関する研究」後藤孝文¹、品川修二¹、吉村久¹、上野薫¹、南基泰¹、小俣達男²、愛知真木子¹（¹中部大・応用生物、²名古屋大・院・生命農）

4) 「モウセンゴケ属植物3種の細胞内硝酸・亜硝酸イオンの蓄積量について」兼松璃々子¹、豊田歩²、森島志依名¹、上野薫¹、南基泰¹、小俣達男³、愛知真木子¹（¹中部大・応用生物、²中部大・院・応用生物、³名古屋大・院・生命農）

5) 「富士山高山帯における蘚苔類の垂直分布および北岳、硫黄岳との出現種の比較」丸尾文乃、徳岡徹、増沢武弘（静岡大・理・生物科学）

6) 「圃場畦畔で雑草化したネズミムギ防除に植物成長調整剤の散布は有効か？」池田六洋、山下雅幸、澤田均（静岡大・農）、石田義樹（静岡農林研）、飛奈宏幸（東北農研）

7) 「エンマコオロギは雑草集団の種子特性を変化させる」内田智、早川雅章、山下雅幸、澤田均（静岡大・農）、足立行徳（岐阜大・院・連農、静岡大・農）、市原実（静岡農林研）

8) 「伝統的農地の草本の高い種多様性は、生育地の不均一性と分散の制限に起因するか？」丹野夕輝（岐阜大・院・連農、静岡大・農）、山下雅幸、澤田均（静岡大・農）

9) 「草刈り強度の違いが圃場畦畔の種子食性昆虫に及ぼす影響」成岡孝史（静岡大・農）、丹野夕輝（岐阜大・院・連農、静岡大・農）、山下雅幸、澤田均（静岡大・農）

10) 「エンドファイト感染ネズミムギはアカスジカスミカメ孵化幼虫の生存率を低下させる」水元駿輔、山口翔、藤井聖、名井健、山下雅幸、澤田均（静岡大・農）、松野和夫、市原実、稲垣栄洋（静岡農林研）、荒川明、菅原幸哉（畜草研）、柴卓也（中央農研）

11) 「水田の土着天敵コモリグモはレンゲによって高く

- 維持される」山口翔、水元駿輔、名井健、藤井聖、山下雅幸、澤田均（静岡大・農）、松野和夫、稲垣栄洋、市原実、済木千恵子（静岡農林研）
- 12) 「上限温度をパラメータに含む外来冬雑草ネズミギの出芽モデル」足立行徳（岐阜大院・連合農、静岡大・農）、山下雅幸、澤田均（静岡大・農）、浅井元朗（中央農研）
 - 13) 「ツツジ科の生殖器官の比較解剖学」見上賢吾、徳岡徹（静岡大・理）
 - 14) 「クノニア科の分子系統解析」松林龍、徳岡徹（静岡大・理）
 - 15) 「富士山、愛鷹山、毛無山の山地帯フロラの比較研究」西村雄太、徳岡徹（静岡大・理）
 - 16) 「伊豆半島および伊豆諸島におけるススキ属3種の生物地理学的研究」富田美紀、徳岡徹、吉永光一、増澤武弘（静岡大・理）
 - 17) 「消雪時期がハイマツの当年枝成長に及ぼす影響」横山将大（富大・院・理工）、和田直也（富大・極東地域研）
 - 18) 「標高の異なるハイマツ群落での落葉分解と中型土壤動物の関係」松島綾子（富大・院・理工）、和田直也（富大・極東地域研）
 - 19) 「木曾駒ヶ岳周辺のウメノキゴケ科地衣類の空間分布」矢久保允也（信大院・工）、田中健太（筑波大・菅平セ）、佐藤利幸（信大・理）
 - 20) 「甲府盆地周辺の分布形態から見るシダ植物種の気候適応」松浦亮介（信大院・工）
 - 21) 「ハヶ岳の水草多様性 ～池の標高・表面積による水草相の変化～」東俊太郎（信大・理）、佐藤利幸（信大・理）
 - 22) 「中部地方南部・リニア新幹線予定ベルトのシダ植物多様性について」佐藤利幸（信大・理）、松浦亮介（信大院・工）、田中崇行（信大院・総工）
 - 23) 「佐鳴湖生態系に関する報告：佐鳴湖プロジェクトから」戸田三津夫、小野田貴光（静岡大・工）

近畿地区会

- (1) 2011年度第1回地区会委員会
日時：2011年6月25日（土）
会場：奈良女子大学
議事：1) 2011年度事業計画案：フィールドシンポ、公募シンポの募集、第2回地区会例会 2) 2010年度会計報告と2011年度会計予算案 3) 次期近畿地区会会長と事務局 4) 近畿地区会第12回奨励賞の選考
- (2) 2011年度近畿地区会総会
日時：2011年6月25日（土）
会場：奈良女子大学
議事：1) 深泥池の管理に関する要望書の提出 2) 2011年度事業計画案 3) 2010年度会計報告と2011年度会計予算案
- (3) 2011年第1回例会
日時：2011年6月25日（土）
会場：奈良女子大学

第11回日本生態学会近畿地区会奨励賞授賞式（堀江明香氏、川津一隆氏）
（一般発表）

- 1) 「地域および栽培管理の違いが水田に生息する水生昆虫の種組成に及ぼす影響」浜崎健児・田中幸一（農環研・生物多様性）
 - 2) 「種間競争が植食性昆虫の食草を決めている」大秦正揚（生態研センター）・大崎直太（京大・昆虫生態）
 - 3) 「ミズキとサワグルミの樹形の比較—樹形と生活様式の関係—」弓山大輔・岡田直紀（京大院・農）
 - 4) 安宅未央子（京大院・農）・小南裕志（森林総研）・上村真由子（日大）・植松千代美（大阪市大）・谷誠・小杉緑子（京大院・農）：落葉分解呼吸量の環境応答特性とその樹種間比較
 - 5) 吉村謙一（森林総研・関西）：樹冠内におけるフェノロジーの違いと個葉炭素収支
 - 6) 矢尾田清幸・嘉田良平・斉藤哲（総合地球研）：フィリピン・ラグナ湖集水域の生態リスク管理に向けた水質汚染要因の抽出
- (4) 2011年度フィールドシンポジウム
テーマ「木津川の自然再生に向けて」（世話役：京大防災研・竹門康弘氏）
日時：2011年10月8日（土）
場所：京都府八幡市・木津川市ほか
内容：午前中現地視察。午後、木津川市加茂文化センターにおいて、シンポジウム開催。
参加者：講師7名、参加者約40名
- (5) 2011年度「公募シンポジウム・研究集会」の選考
表記シンポジウム・研究集会の募集を6月27日～7月31日に行い、応募2件について審査委員会による審査の後、近畿地区委員会に審査結果を諮り、10月4日付けで2件への助成が承認された。
- (6) 2011年度第2回地区会委員会・例会（予定）
日時：2011年12月10日（土）
会場：神戸大学
- 1) 地区会委員会
 - 2) 第12回日本生態学会近畿地区会奨励賞授賞式（大秦正揚氏）
 - 3) 例会（一般発表；題未定）

中国四国地区会

- (1) 第55回中国四国地区大会（2011年5月14, 15日、於：香川大学）
【ポスター発表】（5月14日）
「干潟に生育するハマサジの発芽と塩分条件」○荒木悟・國井秀伸（島根大学・汽水域研究センター）
「太田川放水路の人工干潟形成にともなう陸生節足動物とカニ類の群集の変化」○鶴崎展巨¹・井原庸²・亀山剛³・一澤圭⁴・河上康子⁵（¹鳥取大・地域・地域環境、²広島県環境保健協会、³復建調査設計、⁴鳥取県立博物館、⁵高槻市）
「旭川中流域に生息するアカザ（*Liobagrus reinii*）の季節による植生の変動」○撫養昂己¹・齋藤達昭²・中村圭司³・榎津智紀³（¹岡山理科大学・理・総合理、²岡山理科大学・

理・基礎理, ³岡山理科大・総情・生地)

「岡山県白髪溪谷におけるカジカ (*Cottus pollux*) の地域個体群の mtDNA 解析」○井上宏和¹・斎藤達昭²・藤原知広² (¹岡山理大院・理, ²岡山理大・理)

「徳島県域におけるニホンジカによる植生被害状況」○品川千種¹・小串重治¹・森一生²・鎌田磨人³ (NPO 徳島保全生物学研究会, ²徳島県西部総合県民局保健福祉環境部, ³徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部)

「四国南西部・三本杭におけるニホンジカの剥皮被害による天然落葉広葉樹林の衰退」○奥村栄朗¹・奥田史郎²・伊藤武治¹・酒井敦¹ (¹森林総研・四国, ²森林総研・関西)

「高知県中部山間地の異なる地域における棚田周辺に成立する小規模草地植生の比較」○世木田和也¹・兼田侑也¹・石川慎吾² (¹高知大学・院・総合人間自然科学, ²高知大学・理)

「高知県の山間地における放棄年数の異なる棚田の埋土種子集団」○細川雅代¹・平野美奈子²・岸大介²・山田奈美²・石川慎吾² (¹高知大学・院・総合人間自然科学, ²高知大学・理)

「堤防のり面に定着したオオキンケイギクの生育と植生管理様式との関係」○瓜生真也・波田善夫 (岡山理科大・総情・生地)

「高知県物部川下流域の砂礫堆における植生変遷と立地環境の変化」○古田観佳子¹・石川慎吾² (¹高知大学・院・総合人間自然科学, ²高知大学・理)

「龍河洞スカイライン沿いの植物相」○林枝里香¹・田中伸幸² (¹高知大学・院・総合人間自然, ²高知県立牧野植物園)

「中国内モンゴルの砂丘緑化地に植栽された灌木 *Caragana korshinskii* の天然更新の可能性」○田中晴飛¹・高橋遥香¹・原鋭次郎²・増田達志³・衣笠利彦¹ (¹鳥取大・農, ²(社)地球緑化クラブ, ³環境 NGO エコスタイル・ネット)

「コケ植物の散布様式と潜在的な遺伝的多様性について—蘚類アカイチイゴケ *Pseudotaxiphyllum pohliicarpum* (Sull. & Lesq.) Z. Iwats. の例—」○久保晴盛¹・向井誠二²・坪田博美¹ (¹広島大・院・理, ²広島大・技術センター)

【口頭発表】(5月15日)

「岡山県旭川中流域竹枝地区におけるアカザの生息状況と年齢構成」○柏雄介¹・森下陽介²・小林秀司²・斎藤達昭² (NPO 法人岡山淡水魚研究会, ²岡山理科大学)

「岡山県における陸生小型哺乳類相調査—主に高梁川流域について—」○森光亮太¹・横山貴史²・小林秀司³ (¹岡山理科大学・院・総情・生地, ²八千代エンジニアリング, ³岡山理科大学・理・動物)

「ダニ媒介性感染症のリスク評価に対する小型齧歯類の生態学的研究からのアプローチ (予報)」○中本敦^{1,2}・木田浩司¹・森光亮太²・小林秀司²・岸本壽男¹ (¹岡山県環境保健センター, ²岡山理科大学・理)

「JaSPa における外来鳥ソウシチョウの分布拡大—孤立したブナ林での侵略的外来種の挙動—」○佐藤重穂¹・金城芳典² (¹森林総合研究所四国支所, ²四国自然史科

学研究センター)

「四万十川支流中筋川におけるオオカナダモとササバモの棲み分け現象について」○山ノ内崇志¹・石川慎吾² (¹高知大学・院・総合人間自然科学, ²高知大学・理)

「モウソウチクの稈密度の増加は里山林の現存量をどう変えるか?:8年間の追跡から」○里村多香美・小林剛 (香川大学・農)

「香川県白山のサクラ植栽地における植栽樹と雑草・雑木の生育状態の関係」○森川沙依里¹・里村多香美²・小林剛² (¹香川大学・院・農, ²香川大学・農)

「四国山地三嶺山域稜線部におけるニホンジカの食害によるササ草原の衰退とヤマヌカボを用いた植生回復」中嶋宏心¹・森本梓紗¹・石川慎吾¹・坂本彰² (¹高知大学・理, ²三嶺の森をまもるみんなの会)

【高校生研究発表】(5月14日)

【公開シンポジウム】(5月14日)

中国・四国地域に潜む多様な環境と生物地球環境の縮図

「JaSPa システム」(世話人:小林剛・山田佳裕)

「中国・四国地域の環境や生物の特徴を「JaSPa システム」として見直してみよう」小林剛 (香川大学農学部)

「JaSPa システムの利用:水質の多様性から生物を診る」中野孝教 (総合地球環境学研究所)

「JaSPa システムにおける3つの海 (日本海・瀬戸内海・太平洋) の違いとつながり」一見和彦 (香川大学 瀬戸内圏研究センター 庵治マリンステーション)

【総会】(5月15日)

a. 報告事項

庶務報告

地区会員の動向 (2010年12月末現在308名、昨年度+6名)、会費納入率、活動報告、シンポジウム等への補助金支出

会計報告 2010年度会計

各種委員会報告

地区会ホームページ

生物多様性シンポジウム報告 (4月17日、徳島大学)

b. 承認事項

2010年度会計決算

2012年度合同支部大会開催地:島根大学

c. 審議事項

2010年度会計予算

2012年度合同支部大会開催地:島根

その他 (地区会ホームページ担当、編集)

九州地区会

(1) 2010年度地区委員会

2010年5月22日(土)九州大学箱崎キャンパス

(2) 地区大会

第55回三学会九州支部・地区合同大会

会期:2010年5月22日(土)~23日(日)

会場:九州大学箱崎キャンパス (22日)、

九州産業大学工学部 (23日)

【一般講演】

「熊本県菊池溪谷における哺乳類相のリセンサス」*安田雅俊 (森林総研九州)・大野愛子 (熊本県立大)・井上

昭夫（熊本県立大）

「山都町内大臣の隧道で確認されたコウモリ類」*坂田拓司（熊本野生生物研究会、千原台高校）・中園敏之（〃、九州自然環境研究所）・荒井秋晴（〃、九歯大・総合教育）・天野守哉（〃、熊本県文化企画課）・歌岡宏信（〃、真和中学・高等学校）・田畑清霧（〃、八代高等学校）・田上弘隆（〃、開新高等学校）・長尾圭佑（〃、宇土高等学校）・松下正志（〃）

「ユビナガコウモリ *Miniopterus fuliginosus* における音声の発達について」*船越公威・新井あいか（鹿児島国際大・国際文化）

「糞内容からみたテンの生息状況に与える大規模工事の影響」*荒井秋晴（九歯大・総合教育）・足立高行・桑原佳子（応用生態研）

「ハタネズミ種内の遺伝的分化」*富田宏・酒泉満（新潟大・理・自然環境）・江口和洋（九大院・理・生物）

「マングローブの一種オヒルギの遺伝的多様性と地域分布Ⅱ」永石美聡・美濃部純子・梅崎佐和子・*小泉修（福女大・人間環境）

「子の生存リスクに応じて卵寄生蜂は寄主卵塊に残す情報を変化させる」*北野伸雄・馬場成実・上野高敏（九大院・生防研）

「フタバシツチカメムシ雌親は振動を用いて幼虫の同調孵化を促す」*向井裕美（佐賀大・農）・弘中満太郎（浜松医大・生物）・野間口眞太郎（佐賀大・農）

「アオツラミツスイによる種間の巣の乗っ取り」*江口和洋（九大院・理・生物）

「ハシボソガラスにおける貝落とし行動の特性」*森田詩織（九州大・シス生・シス生）・江口和洋（九州大・理・生物）

「九州南部における渡り・越冬期のシロハラによる都市緑地の利用状況」*平田令子（鹿大・院・農）・畑邦彦・曾根晃一（鹿大・農）・茂田良光（山階鳥研）

「九州南部におけるウミニナ・ホソウミニナの分布と形態変異」*山本智子・籠原啓文・山本耕聖（鹿児島大・水産）

「ハマグリ粘液糸による移動 蛤は一夜に三里走る」*逸見泰久（熊本大・沿岸域センター）・高日新也（熊本大・理）

「有明海における底生生物の分布状況 —ヨコエビ類を中心に—」*森敬介（国立水産病総合研究センター）

「宮崎市一ツ葉海岸の海岸後退の歴史とアカウミガメの産卵・上陸状況への影響」*岩本俊孝・山北聡・木下麻貴・古賀裕美・立野千穂・漆畑翔太（宮崎大・教育文化）・宮崎野生動物研究会

【高校生研究発表】

「ガマ池の環境復元から自然界における好気性細菌の役割について考える～有明海干潟の疲弊の原因と川砂の役割まで～」川原大基（八女・2年）・松竹崇志（八女・1年）[顧問：木庭慎治]

「皿倉山のマント群落および群落名の正式な決定方法について」古田友美・西野由姫（九州国際大学付属3年）・河端千晶・清水美沙・月原由貴・村尾裕美（九州国際大学付属2年）[顧問：本田守]

「オジギソウの光との関係について」富田明（城南2年）[顧問：糸山武彦]

「ハツカネズミの行動特性の調査」屋宜禎央・本田傑（修猷館3年）・吉田周平（修猷館2年）[顧問：跡部弘美]

「2種トビムシの総生産量推定について」福田奈緒・添田晃斉（自由ヶ丘2年）[顧問：田中毅]

「パワフル納豆菌もワサビは苦手？」吉本櫻（福岡3年）山迫彩華・平尾泰子（福岡2年）[顧問：嶺岸勝文]

「ダンゴムシの集合に関する研究」太田喜之・児玉俊介・石松美紗樹（東筑3年）・二神桃子（東筑2年）[顧問：佐竹美恵子]

【特別講演】

「地球規模で行う観察研究、渡り鳥の衛星追跡：どこを渡るのか、何故そこを渡るのか」山口典之（東京大・農学生命科学・生圏システム）

(3) 地区例会（生態学会話題提供のみ）

第481回 5月29日(土)沖縄(名桜大学講義棟109号室)公開シンポジウム「生物多様性地域戦略～戦略に資するモニタリングデータの効果的収集～」

1. 生物多様性基本法と生物多様性地域戦略
奥田直久（環境省那覇自然環境事務所）
2. 南西諸島における生物多様性優先保全地域の地図づくり
安村茂樹（WWF ジャパン自然保護室）

3. 生物多様性ちば県戦略のモニタリング活動
浅田正彦（千葉県・生物多様性センター）
4. 総合討論「生物多様性地域戦略に資するモニタリングデータの効果的収集」

パネリスト：浅田正彦（千葉県・生物多様性センター）・阿部慎太郎（環境省那覇自然環境事務所）・城間篤（沖縄県自然保護課）・田中聡（沖縄県立博物館・美術館）・花井正光（元琉球大学観光産業科学部）
進行：安村茂樹（WWF ジャパン）

第482回 7月25日(月)鹿児島（鹿児島大学水産学部1号館41号教室）

「招かれざる客達～鹿児島における外来種問題を知る・考える～」

- 1) 鹿児島のアフリカマイマイの騒動とその経緯
富山清升（鹿児島大学理学部）
- 2) 鹿児島県本土に生息するマングースの現状
船越公威（鹿児島国際大学国際文化学部）
- 3) 日本発外来ワタリガニの根絶漁具の開発について
ミゲル・バスケス（鹿児島大学水産学部）
- 4) 外来生物問題の考え方～まずは、鹿児島の外来魚の事例から～
中井克樹（滋賀県立琵琶湖博物館）

第483回 11月13日(土)佐賀（佐賀大学農学部）

「子を一斉に孵化させるには？—フタバシツチカメムシ雌親の孵化調節行動—」向井裕美（佐賀大学農学部）

第484回 11月13日(土)宮崎（宮崎大学農学部）

「森のネズミの春夏秋冬～アカネズミの季節的な繁殖と社会行動～」坂本信介（宮崎大学フロンティア科学実験総合センター）

第485回 11月13日(土)熊本（熊本大学理学部）

1. 「オキザリス(カタバミ属)の自家不和合性について」西坂幸祐(熊本県立八代南高校:福山みゆき)
 2. 「阿蘇清峰・阿蘇中央高校小柏演習林周辺の植物についてII」荒家健・島田雄紀・黒木志穂・北里雄亮・荒井健太・井上龍生・坂本彩華(熊本県立阿蘇・清峰高校:浦部香里)
 3. 「ヨモギのアレロパシー効果とその活用」高宮大・伊東翔馬・眞崎大地・松崎一貴・三井美幸・吉中愛理(熊本県立高森高校:古閑博昭)
 4. 「コウモリ類の糞分析から判ること」小田詩織・森本和月・吉村友秀・岡部祥子(真和高校:歌岡宏信)
 5. 「ナガミヒナゲシについての研究」石原健・松下隼人・山本あゆ・黒木慧太・佃仙子・安永真菜・竹本晃・米重成美(熊本県立第二高校:瀬上昭博)
- 第486回 12月4日(土)福岡(九州大学農学部)
「ニワシドリ類における多要素ディスプレイの進化」江口和洋(九大・院・理・生物科学)
- 第487回 12月18日(土)鹿児島(鹿児島大学理学部)(同時開催 コアSSH研究会)
【三学会特別講演】
「共生窒素固定—人類の未来を支える植物と微生物の共同作業—」内海俊樹(鹿児島大学大学院理工学研究科)
【高校生によるポスター発表】
文部科学省コアSSH・ダイコン多様性コンソーシアム参画19校
【高校生による課題研究口頭発表—鹿児島県高校理科部会推薦】
「砂防堰におけるヤクシマカワゴロモのモニタリング調査について」鹿児島県立屋久島高等学校 羽生皓一・森下直(指導:上舞哲也)
「オトシブミとその寄生蜂に関する研究2010～オトシブミの卵をめぐる寄生蜂3種のミクロな生存競争～」鹿児島県立錦江湾高等学校 厚地賢人・白拍子亞門・迫瑞菜・溝口晟平・石神祐佳・山田大杜・園田凌大・中夷勇輝・小原都(指導:小溝克己)
- 第488回 12月4日(土)長崎(長崎大学医学部)
「ハマボウ(アオイ科)の分布と生態、その保全」中西弘樹(長崎大学教育学部)
「済州大学本部キャンパス(韓国)の蘚苔類フロラとフロラ多様性」*下本敬己・任垠映・中西こずえ(長崎大学環境科学部)
「長崎県の河川環境と高等植物フロラ」*柳村香里・松藤俊輔・中西こずえ(長崎大学環境科学部)
- 第489回 12月19日(日)大分(大分大学教育福祉科学部)
【ポスターセッション】(*は指導教諭)
「三山比較にもとづく保水力についての一考察」市原健太郎・黒澤太智・三股徳波・森田海斗・植村真善・小手川巧・志賀雄樹・小川裕*・沢田康子*(大分県立佐伯鶴城高等学校)

- 「別府の川からわかること～地形と温泉の関係を考える～」由見綾菜・甲斐敬之・平島清一*(大分県立別府青山高等学校)
「耶馬溪町のホタルの生態」江島裕太・芦馬南・江口茜・伊藤凌太・佐藤心平・勝本啓悟・徳光裕美*・中山博子*・野尻直朗*(大分県立中津南高等学校耶馬溪校)
「三重町の石灰岩地域における陸産巻貝の調査」高橋明花・白井航平・山本龍太郎・宮川悠樹・佐藤誉将・玉ノ井大生・後藤智恵*(大分県立三重総合高等学校)
「植物の運動について」羽田野励次・徳田崇志・鈴木真太郎・川邊俊二*(大分県立竹田高等学校)
「日田市殿町釜ヶ瀬林道周辺の甲虫類から自然環境を考える試み」田中聡一・吉光孝輝・小野彰子・安松大*(大分県立日田高等学校)
「ニホンイモリの捕食行動における嗅覚の役割」村長達・高瀬寛久・渡邊ひろ美*(大分県立大分舞鶴高等学校)
「プレファリスマの簡易培養液」柴田毅・安東佳輔・末廣麟太郎・渡邊ひろ美*(大分県立大分舞鶴高等学校)
「カシワの抗菌性」鈴木勇人・渡邊ひろ美*(大分県立大分舞鶴高等学校)
「地球にやさしく!地域未利用資源の活用 大豆煮汁発酵液の野菜類の生育に与える効果」相部駿・穴見春香・荒木聡・清國翔太・佐野優樹・重信梨沙・戸田隼人・橋本竜二・松原省市・小俣秀之*(大分県立国東高等学校)
「ジョウロウグモの研究～4年間のまとめ～」寒田彩佳・清原杏名・水津明穂・丸山奈々・広瀬奈津子・小山田治*(大分県立大分上野丘高等学校)
「ミミズの棲む環境～土壌生物との関係から～」島本一弥・松下聡志・増西佑斗・高野あさみ*(大分県立中津北高等学校)
「トラマルハナバチは人工花に騙されるのか?～野生バチの学習行動について～」小野美里・綾戸瑞葉・岩男美美江・衛藤蘭・河野麻衣果・後藤聡・本田綾・溝部文弥・深町真由*(大分県立安心院高等学校)
「アメンボの捕食行動における視覚の役割について」田島誉大・門脇悠稀・神原和也・大野孝*(大分県立大分豊府高等学校)
- (4) 地区会報58、59号発行

お知らせ

1. 第32回(2012年)関東地区生態学関係修士論文発表会開催のお知らせ

毎年恒例の生態学関係修士論文発表会を下記の通りに早稲田大学において開催致します。この発表会は、本年度生態学関係の修士課程を修了される大学院生に、その研究成果を発表する機会を提供するものです。また、博士課程に進学をする方々には同期との良き交流の場となります。この発表会では日本生態学会関東地区会の会員・非会員に限らず発表できますので、多くの方に御参加頂きたいと考えております。また、皆様には周囲の大学院生への周知の御願いとともに、当日の御来聴を心よりお待ちしております。

※ 各申込み締切日などの詳細はホームページ (<http://ecologykantomaster.web.fc2.com/>) を御覧ください。

主催：生態学会関東地区会

日時：2012年3月3日(土)

会場：早稲田大学 16号館 405・406教室

※早稲田大学へのアクセスおよび構内マップ

(<http://www.waseda.jp/jp/campus/waseda.html>)

問い合わせ先：2012年関東地区生態学関係修士論文発表会実行委員会

(ecology.kanto.master@gmail.com)

本年度実行委員

代表：友常満利(早稲田大)

委員：長田穰、辰巳晋一、照井慧(東京大)、深町篤子(東京農工大)、増本翔太(総研大)

2. The 9th Asia-Pacific Marine Biotechnology Conference

APMBC2012のお知らせ

The 9th Asia-Pacific Marine Biotechnology Conference (APMBC2012) を下記の要領で開催致します。皆様のご参加をお待ちしております。

会期：2012年7月13日(金) - 16日(月)(海の日)

会場：高知市文化プラザ かるぼーと

(〒780-8529 高知市九反田 2-1)

大会役員：組織委員長 深見 公雄 高知大学
理事 副学長

：庶務 幹事 富永 明 高知大学
総合科学系 黒潮圏科学部門 教授

：庶務 幹事 津田 正史 高知大学
総合科学系 複合領域科学部門 教授

懇親会：開催日：2012年7月15日(日)

時間：19:00 ~ 21:00 (予定)

場所：ホテル日航高知旭ロイヤル (予定)

●大会の内容

1. 一般講演(口頭発表・ポスター発表)

2. 一般公開シンポジウム

●発表形式

1. 口頭発表：一般講演は講演15分、質疑5分、(PowerPointによる液晶プロジェクター映写のみとする)、

2. ポスター発表

3. ポスター口頭発表：学生を対象とした優秀ポスターの表彰を予定

4. 口頭発表、ポスター口頭発表とも、英語による発表とします。

●一般講演のセッション

- ・ Metagenomics
- ・ Biotechnology of Macroalgae
- ・ Biotechnology of Microalgae
- ・ Marine Microbiology
- ・ Extremophiles
- ・ Marine Viruses

- ・ Bioactivity of Marine Organisms
- ・ Marine Bioactive Compounds
- ・ Marine Bioproducts
- ・ Biotechnology of Fishery Products
- ・ Marine Toxins
- ・ Biotechnology for Environmental Science
- ・ Biotechnology for Aquaculture
- ・ Biomineralization
- ・ Biotechnology of Deep Seawater
- ・ Biotechnology for Energy Production

●講演申し込み方法

・発表希望者は、web上よりお申し込み下さい。詳細は大会ホームページでご確認下さい。

・発表申し込みの締め切り 平成24年3月30日

●参加登録方法

・参加登録希望者は、web上よりお申し込み下さい。詳細は大会ホームページでご確認下さい。

・早期参加登録の締め切り 平成24年5月31日

・参加登録費

	支払期限	早期参加登録	早期参加登録以降～当日
		H24 5/31 まで	H24 6/1 以降
一般参加者		¥35,000	¥40,000
学生		¥10,000	¥15,000

*Tax Included.

参加登録費には、ウェルカムレセプション、講演展示会への参加、ランチ(14日、15日)、要旨集、コーヒープレイクが含まれます。

JSMB学会ホームページ：

<http://marinebiotechnology.jp/>

APMBC2012 ホームページ：

<http://www.kochi-u.ac.jp/9apmbc/>

(平成24年1月開設予定)

●お問い合わせ先

The 9th APMBC 事務局

〒783-8502 南国市物部乙 200 高知大学
海洋コア総合研究センター

E-mail：apmbc-9@kochi-u.ac.jp

TEL & FAX：088-864-6720

書評

大串隆之・近藤倫生・難波利幸 編(2009)「シリーズ群集生態学3 生物間ネットワークを紐とく」京都大学学術出版会 328pp. ISBN:978-4876983452 定価 2900円(税別)

タイトルにある「生物」「ネットワーク」に引かれて本書を手を取った。評者は生態学の研究をしているわけではないが、既に出版から2年以上経過するこのシリーズに関しては書評はあまりみかけないこともあり、本書

について書くことにした。評者の専門分野は統計物理学・ランダム系の物理学であるが、ネットワーク理論とカウフマン理論の研究経験があり、生態学（むしろ、野原、道端、畑、田んぼにおける生態系）に大いに興味を持つ一読者という立場からの、誤読も恐れぬ見方である。

本書は「相互作用」（もしくはこれを「ネットワーク」と置き換えても良いが、）をキーワードとして主に種間のダイナミクスについて、1章と6章では数理モデルの解析を中心に、2-5章は相互作用に関する実験・観察の結果を中心に解説している。終章はまとめと展望、そして1章と6章に関連する2つのコラムから構成されている。全体的な印象として、1章・6章と、2-5章の繋がりが必ずしも十分ではなく、「一体どのような読者を想定して書いた本なのか？」という疑問が湧いてきた。1章に、この巻の目的は「種間相互作用を基に生物間ネットワークを紐とくことである」（p.42）とある。しかし、対象とする読者やそれに対する配慮に関しての記述は無い。全体として学会誌の解説をまとめ直したような、専門家のみに向けて書いたという印象を受ける。実際、終章「生物間ネットワークを紐とく」にあるように、新たな「研究」を生み出すことが本書の目的なのかもしれない。シリーズ第1巻がまだ刊行されていないが、そこに「何のためのシリーズか」「どのような読者に対するものなのか」明記するのだろうか。

各章の内容は、まえがきに加え、それぞれの章の冒頭にも概要としてまとめられている。（各節の小見出しなどはweb上でも知ることができ、おおよその内容も想像できるようになっている。）ここではまず、2-5章について簡潔に記し、その後1章および6章の記述について言及することとする。

2章「相互作用の多彩な効果 河川群集を理解する（片野 修）」では、河川群集の事例としてアユとウグイの相互作用、アユと雑食性魚類の関係など、相互作用についての研究結果が報告されている。3章「相互作用の変異性と群集動態（堀 正和）」では、野外における相互作用の研究と、その時空間的に変化などについて岩礁潮間帯の生物群集の実例をもとに説明している。4章「生物群集のキーストン アリの役割（市岡孝朗）」では、アリが生み出す多様な間接相互作用や、種間競争を介した侵入アリによる生態系の攪乱などが紹介されている。各小節の終わりが、「……課題である。」「……興味深い問題である。」や「……今後の研究が待たれる。」と結ばれていることが多いのは、キーストン種であるアリ研究の困難さを象徴しているのであろう。5章「食物網から間接相互作用網へ（大串隆之）」では、植物の変化による間接相互作用や生物多様性への影響についてヤナギやセイタカアワダチソウなど実例も含めて解説している。

これら2-5章は、内容が日常で目にする具体的な事例であるという点のみならず、写真や図を用いた説明でわかりやすく、専門家でなくとも現場の迫力やおもしろさが伝わってくる。直接関連する間接相互作用に関する記述は、本シリーズの第二巻2章にもあり、形質変化に関する記述は第二巻1章にもある。

1章「種間相互作用がつかぐ生物群集 直接効果と間

接効果（難波利幸）」では、生物群集における直接・間接相互作用の種類・強度などの整理と、生物群集の安定性について説明している。本書を1章から読み始めた場合、淡々と文章のみで抽象的な説明が続くので内容がわかりにくい。論文のabstractを並べ立てて説明したような印象がある。せつかく2章から5章は身近な生物による具体的事例で、相互作用について説明してありわかりやすいのだから、次のような読み方をすることをお勧めしたい。

1章のわかりにくい点は気にせず読みとばし、続けて2-5章を読んで、さらにコラム1を読んだ後に、もう一度1章を読む。そうすれば、1章で整理されていることの意味が実感できるかと思う。コラム1とコラム2は標準的内容をコンパクトに記してあるので、できれば初めに目を通しておくと他の章が読みやすくなるだろう。

また些細なことではあるが、1章の数式に関し、読み進みにくい箇所を挙げる。

- (i) p.11 式(2)において、捕食者数密度として使用している記号Pの説明が無い。
- (ii) p.23 式(7)にロトカーボルテラモデルの記号がいきなり出てくる。（コラム1に記述あり。）
- (iii) p.24 式(10)の周辺に記号RRの説明が無い。（p.19に出てきている。）
- (iv) p.27 式(13)で使用している記号Kの説明が無い。

1章の初めの方の式なので、より丁寧に記されていないのは残念である。同様に、p.37 式(16)の係数などの説明の不足なども散見される。

1章後半は相互作用の強度に関し、実験データと数理モデルの対応のことが書かれているが、5章の図4、図5のような具体的相互作用 network を使った解析の事例も入れると、数理モデルとの繋がりがわかりやすく身近になり、一冊の本として意味が深まるのではないか。その際は、数理モデルのパラメーター（相互作用強度など）の決め方などにそれほどこだわらず、数値計算で計算可能なあらゆる場合をチェックしていくことも意味があるだろう。安定性などの結果が実在のものとは異なっている、何があれば安定になり得るか、隠れた相互作用などを探る役に立つかもしれない。（既にいろいろ行われているかもしれないが。）

6章「中立モデルとランダム群集モデル（時田恵一郎）」では、抽象的な数理モデルで複雑性と安定性の関係に関し、明確に言えることを説明していると感じた。しかし、もっと図を使うなりしたほうが、読者に内容が伝わるのではないだろうか。実際、引用文献の著者が引用している文献では図を使って説明してあると思われる箇所を、文章のみで簡潔に記述している箇所も多い。本章の説明に対応する図や数値計算結果の一部は、本書の文献にも挙がっている同一著者の他の解説記事（「大規模生物ネットワークの数理」）複雑系の構造と予測 共立出版 2006）にも記されている。そちらのほうが丁寧に記述しており、本書と並行し参照すると理解しやすくなる。

これも些末ではあるが挙げておきたい。3節のGardner and Ashbyのランダム行列を使ったモデルの説明はコラム1と重複するが、行列要素の分散を表す記号

(p.205) が、コラム 1 (p.55) と異なる。レプリケター方程式に関しても、3 節とコラム 1 で重複しているが、こちらも異なる記号で表現されている。3 節の行列 C がコラム 1 での行列 A であるなど、混乱しないような注意が必要だ。(コラム 1 においては別の意味で行列 A が使われている。) 6 章の中心的な内容でもある、反対称ランダム行列レプリケター方程式において、完全な反対称ランダム行列を用いるのは解析的計算の都合であろう。より現実的な状況をモデルに取り込んだらどうなるのか気になることを記しておく。

- (i) 捕食関係を保ったまま、完全反対称性を崩した場合、
 - (ii) 反対称ランダム行列をより現実に近い反対称バンドランダム行列にした場合、
 - (iii) ランダムではなく相関のあるバンドランダム行列にした場合、
- などにも興味が湧いてくる。

また、数値計算での平衡状態に対して、生存種の取り除き効果や switching 捕食や突然変異などの効果を数値計算なら容易に調べられるので、その結果も興味深い。最大固有値のみで、数理モデルの性質を議論するよりも、有限性を考慮し固有値分布全体の性質や固有関数も見ると何がわかるのか。本章に関してだけでも興味は尽きないが、これらも既に (数値) 計算結果があるのかもしれない。

一般に、network 理論や群集生態学を全く分からなくとも、多くの方が現実のネットワークは有限サイズの有向ネットワークであり、その相互作用の強さは時間的変動しネットワークのダイナミクスと結合して変化することがイメージされるであろう。従って、群集生態学から network 科学が学ぶことは数多くあるが、逆はあまりないだろうと思う。人間が頭で考える物より、実在の自然界の方がはるかに豊かで多様で、必ず対応物や現象を内包していると思われる。それが評者の感じる群集生態学の魅力でもある。それに対応するモデルも豊かであるべきだ。よくある言葉をもじって言えば「厳密でなければ数理モデルではない、豊かな内容でなければ数理モデルを学ぶ価値はない」。もし、観測・実験に寄り添っていないとすれば、理論モデルを研究する側の怠慢だと思う。(これはモデル研究を主としている評者自身への戒めでもある。)

まえがきに、其々の章に複数の査読者を付けたとあった。その点で、各章に関連する専門家にとっては各章著者の研究内容をコンパクトに整理されたものになっていて読みやすい書だと思う。後ろには引用文献が 60 ページ近く (約 1000 編) もあり、その方面の研究を進めようとする、学部上級生から大学院生にも良いテキストになろう。(逆に、非専門家にとっては厳選した小数の文献が各章の末尾にあるほうが有難いであろう。) さらに、数理的取り扱いの訓練を多少受けていれば、実在の生態系との関連を実感するのに良い書であろう。これらの点に、本書の特徴と意義が考えられる。

一方、特に 1 章と 6 章に関して、少し異なる分野の読者に対しては、読み進みにくい不親切な部分がある、と

いう印象を否めない。専門雑誌ではないのだから、複数の査読者うち最低一人 (できれば二人) は異なる専門分野の人が入り、理解し易さ、読みやすさを考慮した査読が行われると良かったと思う。記事として読みやすいものにするのか、学術資料としての役割を重視するかのバランスが問題となることは多い。業界の同業者からの思わぬ指摘を受けないように慎重になったために必要最小限の記述になったり、研究以外に余分な時間を取られないようにと、つい研究紹介に終わってしまう場合もあるのかもしれない。

(山田物理学研究所 山田弘明)

Center for Ecological Research NEWS



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 椿 宜高

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

共同利用・共同研究公募のお知らせ

京都大学生態学研究センターは、2010 年度（平成 22 年度）から『生態学・生物多様性科学における共同利用・共同研究拠点』として新たに発足しました。センターでは生態学の基礎研究の推進と生態学関連の共同研究の推進を目的として、共同研究や、研究集会・ワークショップなどの公募を毎年度行っています。詳しくはセンターの HP (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/ecology/cooperative/index.html>) をご参照ください。

2012 年度の公募は、2012 年 1 月 31 日が締め切りです。

協力研究員 (Affiliated Scientist) に関するお知らせとお願い

生態学研究センターでは全国共同利用研究施設として、開かれた研究活動を活発化するために、協力研究員制度を設けています。協力研究員は担当教員とご相談のうえ、施設の一部をセンター員に準じて利用できます。平成 24 年 3 月末で任期満了の協力研究員におかれましては、これまでのご協力に対して厚く御礼申し上げます。改めて平成 24・25 年度の協力研究員を募集いたします。新規及び引き続き協力研究員としてセンターの共同利用を希望される場合は平成 24 年 2 月 29 日（水）までに申請書をご提出いただくようお願いいたします。

申請書の様式はセンター HP (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/ecology/cooperative/cooperative-researchers.html>) からダウンロードできますので、必要事項を入力のうえ電子メールでお送りください。なお、上記締切以後の申請についても随時受け付けています。

申請書の提出先・問い合わせ先

京都大学生態学研究センター共同利用担当 〒520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
E-mail: kyodo-riyo@ecology.kyoto-u.ac.jp Tel: 077-549-8200 Fax: 077-549-82

※京都大学生態学研究センター協力研究員の委嘱についての申し合わせ

- (1) 生態学研究センター（以下「センター」という）の研究活動を推進するため、学内外の研究者に協力研究員を委嘱することができる。
- (2) 協力研究員は、教授会の議に基づき、センター長が委嘱する。
- (3) 協力研究員の任期は原則として 2 年とする。

センター関係者の動き

2011 年度 外国人研究員（客員教授）として中国科学院水生生物研究所・教授の Rhenhui LI 氏が、2012 年 1 月 1 日から 3 月 31 日までの予定で滞在中です。

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。
新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。
下記会費および地区会費の合計を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：日本生態学会

退会する際は前年度内に退会届を事務局まで提出してください（ウェブサイトにて申込フォーム有り）。
会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

		A 会員	B 会員	C 会員
配布 *	Ecological Research + 生態誌	○	○	
	保全誌		○	○
投稿 **	生態誌	○	○	
	保全誌	○	○	○
大会発表	全セッション	○	○	
	自由集会	○	○	○
総会・委員 (選挙・被選挙権)		○	○	○
年会費 ***	正会員 (一般会員)	11,000	13,000	5,000
	正会員 (学生会員)	8,000	10,000	2,500
	団体会員	20,000	22,000	14,000

*Ecological Research および生態誌については冊子を必要としない会員への割引(ER 900 円、生態誌 600 円)を行っています。すでに会員の方が今後申請される場合は2013年度以降の適用となります。新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年度より適用されます。

**Ecological Research への投稿権利は従来通り会員に限定しません。

*** 生態学会では収入の少ない若手一般会員のために、学会費を学生会員と同額にする措置を実施します。詳細はウェブサイトをご覧ください。

地区会費

正会員は、住所(所属機関か自宅のうち、郵送物の配布先となっているほう)により、地区会に参加することになっています。各地区会ではそれぞれ独自に地区会費を定めています。学会費の納入時には、これらも含めて請求しますので、あらかじめご了承ください。

- ・北海道地区 (200 円)：北海道
- ・東北地区 (800 円)：青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県
- ・関東地区 (600 円)：茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県
- ・中部地区 (0 円)：長野県・新潟県・富山県・石川県・福井県・岐阜県・静岡県・愛知県・三重県
- ・近畿地区 (400 円)：滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県
- ・中・四国地区 (400 円)：鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県・徳島県・香川県・愛媛県・高知県
- ・九州地区 (700 円)：福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8

Tel&Fax 075-384-0250

<http://www.esj.ne.jp/>

※ お問い合わせはウェブサイトからお願い致します。